

2025年4月25日



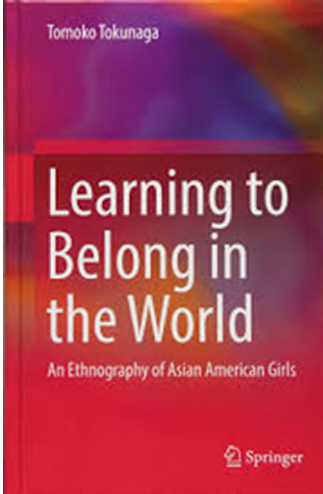
外国につながる子どもの強みを活かす教育 —エンパワメントの視点—

徳永智子
(筑波大学人間系)

自己紹介

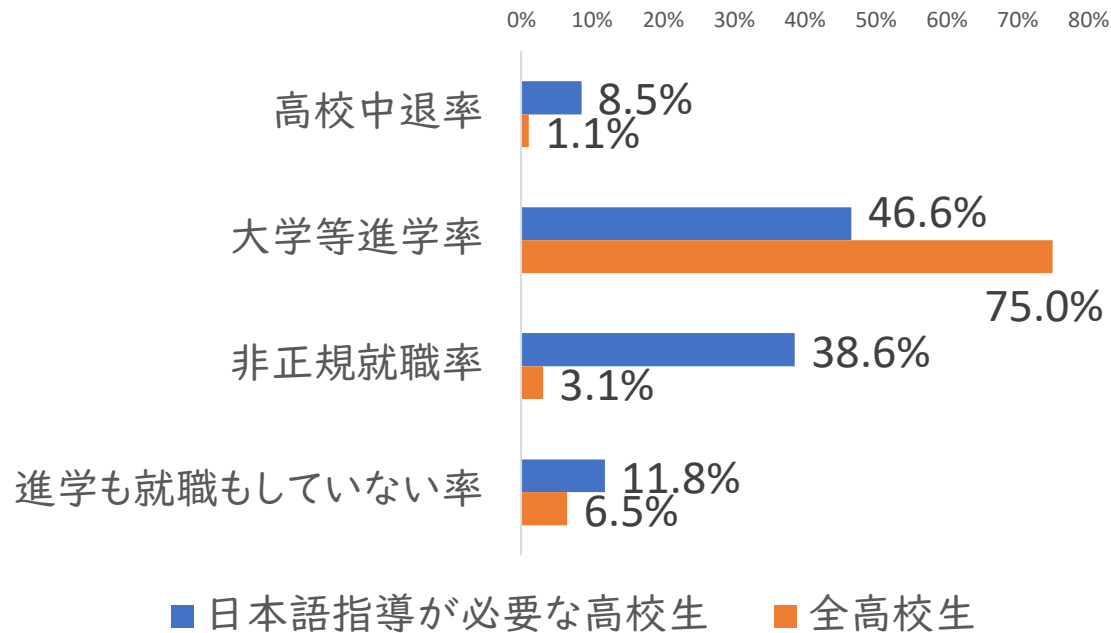
- 専門領域: 教育社会学・教育人類学・異文化間教育学
- 米国メリーランド大学大学院教育学研究科博士課程修了、Ph.D. (教育学)
- 文部科学省中央教育審議会臨時委員 (教育振興基本計画部会、2022-2023)、中央教育審議会専門委員 (生涯学習分科会日本語教育部会、2024-現在)
- 研究テーマ: 日米の移民の子ども・若者の教育支援やエンパワメント
- ◆ 10代の移民女性の帰属意識とアイデンティティ形成のエスノグラフィー
日本とアメリカで10代の移民女性たちのフィールドワークを実施
- ◆ 移民の若者の居場所づくりとエンパワメントの参加型アクションリサーチ (PAR)

⇒ 複数の文化や言語のはざまを生きる子ども・若者が、その強みを発揮できる教育・社会のあり方を研究している。移民の子ども・若者が包摂される教育環境づくりに向けて、研究・実践・アドボカシーに取り組む。



外国につながる子どもの教育課題

日本語指導が必要な高校生等の中退・進路状況



出典:文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(令和5年度)」

日本学会議地域研究委員会多文化共生分科会の提言(2020)

「後期中等教育における外国人生徒に関する施策は、義務教育段階に比べて大幅に遅れている。とりわけ、高校進学率や中退率をめぐる全国平均と日本語教育が必要な外国人生徒の間の著しい格差は、早急に解消に向けた対策がなされるべきである。」

(<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t289-4.pdf>)

- 格差の背景には、マイノリティに不利に働く仕組みがある。言語、家庭の経済状況、在留資格(家族滞在など)、同調圧力、差別・偏見などの障壁をどう取り除けるのか。
- 日本で生まれ育つ子どもや、青年期に来日した子どもなど、多様な背景をもつ子どもたちが、進学や就職をして、将来社会で活躍できるようにするために、どう支援できるのか。

外国につながる子どもと聞くと・・・

日本語ができない。

授業についていけない。学力が低い。

親が教育に熱心でない。

問題行動が多い。

- マイノリティの子どもに「問題」や「欠陥」があると捉える視点。
- マジョリティの言語や文化を「ふつう」とみなす前提。
- 「文化欠陥論」：マイノリティの子どもの言語や文化は劣ったものとされ、学校で成功するにはマジョリティの言語や文化を習得する必要があるという考え方 (Howard 2021; 徳永 2025)。

ストレングス・アプローチ：子どもの強みを活かす

- スtrenグス・アプローチへ

「欠陥」の視点：子どもに「問題」や「欠陥」がある。それらを取り除き、補完、改善する。



ストレングス・アプローチ：子どもがもつ能力や資質、知識などの強みを引き出し、伸ばす。子どもの強みが発揮され、自己肯定感が高まり、エンパワメントにつながる。

子どもの強みを伸ばせるように、まわりの環境を改善することが重要（徳永、2021・2023）。

- 多文化教育・「文化に対応した教育」（culturally responsive pedagogy）（Gay, 2018）

- マイノリティの子どもや家族の強みを活かすことの重要性。

- 教師がマイノリティの子どもの文化や知識、経験を尊重し、それを教育実践に活かすことで、子どもの学びが深まり、エンパワメントやウェルビーイングにつながる。

- 外国につながる子どもの**エンパワメント**

- エンパワメント：「社会で不利な立場に置かれた人々が、取り巻く環境の資源にアクセスし、自身の生活をコントロールする力を高め、潜在的にもつ能力や可能性を発揮していく過程やその結果のこと」（徳永、2023、p.12）。

- エンパワメントの視点から、外国につながる子どもの教育の充実を目指す。

ストレングス・アプローチ：子どもの強みを活かす

- 外国につながる子どもの強みの例

- 制度の中で生き抜く力：移住という大きな試練や困難を乗り越えてきた経験から、たくましさや前向きさなどを身につけている。
- 複数言語・文化の力：複数の言語や文化を理解し、通訳・翻訳ができる。
- コミュニティの力：家族や知人とつながり、支え合う。
- 高い適応能力



「文化のカメレオン」(ポロック・ヴァン・リーケン、2010)：文化への高い適応能力と柔軟力をもつ。場に応じて、言語、行動、外見、文化的習慣を変え、溶け込む特性をもつ。

- 子どもの強みを活かし、伸ばす

- 子どもの母語や文化、生い立ちや家族の歴史などを教育活動に取り入れ、子どもが安心して過ごせる「居場所」のある学校風土を育む。そうした環境の中で、子どもは自らの背景に誇りを持ち、肯定的なアイデンティティを形成していく。
- 子どもはそれぞれ異なる言語や文化、経験を持っているため、一人ひとりに寄り添いながら、子どもの強みを引き出し、伸ばしていくことが重要である。

子どもの「声」を聴く仕組みづくり：エンパワメントへ

- 外国につながる子ども・若者から学ぶ姿勢

- 外国につながる子ども・若者は、自らの経験を通して、その課題に関する深い理解と視点をもつ「専門家」である。かれらの「声」を尊重し、傾聴し、学ぶ姿勢が求められる。
- 大人の役割：子ども・若者のパートナーとして、対等な関係性を目指す。「一人で悩んだり、解決する必要はなくて、（先生に）いっしょに考えてほしい。」（インドルーツ、定時制高校卒）



- アドボカシー：子ども・若者の「声」を反映させる

- 海外では、当事者である子ども・若者が自身の経験に基づいて、学校運営や教育施策の策定に参画する事例が多くある（UNICEF、2022）
- 当事者不在ではなく、子ども・若者の「声」を聴く仕組みがあることで、当事者のニーズに応じた、インパクトのある政策が生まれる。
- 日本の学校運営や教育行政においても、外国につながる子ども・若者の「声」に耳を傾け、それを施策や方針に反映させる仕組みを整えることが求められる。

マジョリティの変容：学校全体で取り組む多文化共生の教育

- 多文化教育（松尾、2023、pp.68-72）

- 学校教育のユニバーサルデザインを目指し、違いにかかわらず、すべての子どもに公正で平等な教育を提供する試み。
- 多文化社会で生き抜く力をもつ市民の育成を目指す。
- 学校全体の改革を目指す。



- 多様性を尊重した学校づくり

- 子どもや教職員の多様性を尊重する。

「言語が2つぐらいできる先生がいたら良かった。日本語以外の言葉が話せたら、生徒から悩み事の相談をされたときに対応できる。」（インドルーツ、定時制高校卒）

- すべての子どもを対象に、多文化共生に学校全体で取り組むモデル校を設置する。学校や教員の多文化共生の取り組みを評価する仕組みを導入する。

「日本人との関わりが大切だし、日本人が他の文化を知るためにやった方がよいと思う。仲良くなって、みんな平等に扱えるようになることを目標としたい。」（フィリピンルーツ、定時制高校卒、専門学校卒、アパレル業界勤務）

- 教員養成課程および管理職・教員研修において、異文化理解や多文化共生に関する科目を必修化する。

実践紹介：定時制高校の多言語交流部（居場所づくり）

- 東京都の大規模な三部制・単位制の定時制高校。フィリピンや中国、ネパールなど、外国につながる生徒が約80名在籍。
- 生徒たちを取り巻く課題：複雑な家庭背景、つながりや資源の不足、中退率・進路未決定率の高さ、居場所のなさ。
- 2015年に中退予防や生徒のエンパワメントを目指して、角田仁先生を中心として多言語交流部（ONE WORLD）の部活動が立ち上がる。
- 高校・一般社団法人kuriya・大学との三者協働。
- 週3回、各1時間程度、主にフィリピンやインドなどにルーツのある生徒と日本人生徒が部員として活動
- 活動内容：文化祭の企画・展示、言語交流（英語セッション・多言語を学ぶ）、ゲームやアクティビティ、アーティストによるワークショップ、校外学習、キャンプへの参加など



実践紹介：生徒のエンパワメントを目指して

- 複数言語・文化が尊重される居場所

「大学生も高校生もONE WORLDに居場所を感じていた。みんな色々な文化的背景をもっているから、1つの文化に同化するプレッシャーを感じなかった」(大学の留学生)

「我が家みたい」「友達と居場所・自分を素直に出せる」(日本人生徒)

「精神的に安心できる場所があると、すごく助かる」(フィリピンの生徒)

- 自己肯定感を育む

学校や地域でネガティブなまなざしを受け、「自信がない」と語る。成功体験を積むことの重要性。

「ONE WORLDに入らなかったら、多分、今みたいにしゃべれないし。自信を持って自分の意見とかしゃべれなかったかもしれない」(フィリピンの生徒)

- リーダーシップの育成

➤ 外国につながる生徒がリーダーとなり、司会や通訳を担い、活躍する。

「日本語が上手になった」「色々な人とのつながりができた」(卒業生)

➤ 卒業後は地域社会の担い手として後輩の育成に貢献(ロールモデル)



外国につながる子どもの強みが発揮される社会を目指して

- **ストレンクス・アプローチ**:外国につながる子ども・若者を無力化するのではなく、かれらがもつ能力や資質、知識などの強みを活かし、伸ばす教育を目指す。
- **マジョリティの変容**:多文化共生や異文化理解の教育から、マジョリティの教職員や児童生徒も学ぶこと。多文化共生の教育は、全ての子どもにとって重要。
- 日本で育つ外国につながる子ども・若者は、多様性が尊重される社会をつくっていく重要な担い手。多様性の象徴として消費するのではなく、子ども一人ひとりが「市民」として、将来社会で活躍できるように、環境整備をし、包摂していくこと。
- 子ども・若者とともに、誰もが生きやすい社会を目指して。多様なニーズを持つ子どものウェルビーイング実現へ。



参考文献

- Gay, G. (2018). *Culturally responsive teaching: Theory, research, and practice*. Teachers College Press.
- Howard, T.C. (2021). Culturally responsive pedagogy. In Banks, J. A. (Ed). *Transforming multicultural education policy and practice: Expanding educational opportunity* (pp. 137-163). New York and London: Teachers College Press, p.133.
- 松尾知明 (2023) 『日本型多文化教育とは何か：「日本人性」を問い直す学びのデザイン』明石書店。
- ポロック、デビッド・C、ヴァン・リーケン、ルース・E、嘉納もも・日部八重子訳『サードカルチャーキッズ—多文化の間で生きる子どもたち—』スリーエーネットワーク, 2010年。
- 佐藤郡衛 (2019) 『多文化社会に生きる子どもの教育—外国人の子ども、海外で学ぶ子どもの現状と課題』明石書店。
- 徳永智子 (2021) 「アメリカのNPOによる中国系移民の教育支援—ストレングス・アプローチから—」恒吉僚子・額賀美紗子編『新グローバル時代に挑む日本の教育—多文化社会を考える比較教育学の視座』東京大学出版会、pp. 113-128.
- 徳永智子・角田仁・海老原周子編 (2023) 『外国につながる若者をつくる多文化共生の未来—協働によるエンパワメントとアドボカシー』明石書店。
- 徳永智子・角田仁・海老原周子 (2023) 「外国につながる若者の居場所づくりとキャリア支援—都立定時制高校における三者協働の実践」『日本語教育』(184), pp. 19-33.
- 徳永智子 (2025) 「アメリカにおける移民の子どもの生活世界と教育」恒吉僚子編『グローバル時代の教育文化—世界の中で考える日本の教育—』放送大学教育振興会、pp. 103-118.
- UNICEF (2022) 2022 UNICEF Youth Advocacy Guide (<https://www.voicesofyouth.org/tools-resources/2022-unicef-youth-advocacy-guide-eng>)



ありがとうございました